

平和と神道の問題性と宗教の未来

上智大学グリーンケア研究所特任教授
京都大学名誉教授
鎌田 東二

はじめに～三つの前置き

「平和と神道の問題性と宗教の未来～ゆずりとゆるしによる変容と公共」という話をする前に3つの前置きを話します。

1つは、東日本大震災後のことです。本当に日本に神社とお寺があってよかったと実感しました。被災地を巡っていて、一番ほっとしたのは地域社会の中で神社とお寺が無事で避難所になったり拠り所となったりしていた点です。広域にわたって大変な被害を受けた中で、何を手掛かり足掛かりにしながら再建していくことができるかを考えていったとき、やはり地元にお寺や神社があるということは、深い拠り所となり、安心を生み出します。

それが実際に具体的にどう現れたかという点、東北地方にはイタコなどの霊媒が死者の口寄せをするということがあって、シャーマニズム的な民間信仰の非常に強いところですから、亡くなった人、死者を供養するということや、亡くなった人たちに霊的に対面することがとても重要な意味合いを持ちます。それらは主に神仏習合的な文化を持ったお寺が担ってきて、お寺とつながる民間信仰的な仏教的シャーマニズムがそれを支えてきたわけです。

同時に、神道の中にあるシャーマニズムとも微妙に絡んでいます。また、神社の方は、神社の境内に駆け上がって助かった例が多々あるように、避難地や避難所になりました。神社の多くは小高い山にあるので、そこに津波が押し寄せてきたとき、高台になっている神社の境内に駆け上がって助かったという人はあちこちにいます。

町の中にある神社もありますが、神社は多く鎮守の森のような、木が多いと

ころ、小高いところが圧倒的に多い。その土地、地形、地質の中でもっとも安全な地帯に鎮座します。例えば、『となりのトトロ』のような巨大なクスノキがあったりするわけです。千年以上にわたって巨大なクスノキが生え続けているということは、そこが安定した地盤だということを証明しています。

そういう安定した地盤が神社として今も残っている。そこには教義的な思想性という点では明確なものはないけれど、その場所ですっと祭りを行なってきたり、人々が五穀豊穡や家内安全や商売繁盛などの日常的な願い事をしてきたところですよ。生活の安心と安全を一番大切にしてきたところが神社です。

そういう神社の中で祭りが行われ、例えば、岩手県の場合は特殊な、獅子舞に代わって虎舞が行なわれてきました。獅子じゃなくて虎なんですね。仮設住宅に入っている被災者のところに行って、虎舞をやる。するとみな大いに活気づく。そんな事例がたくさんあります。

地元の神社に伝わってきた祭りの中で行なわれてきた民俗芸能がこの時どれほど励みと助けになったかということのを再認識させられました。そこで、日本の各地域にコンビニよりもたくさんの8万余社の神社や7万5千寺ほどのお寺があることの持つ意味を、これから平和や安心や安全という社会的公共を考えていく際にもう一回注目すべきだと考えています。

2点目は、湾岸戦争は1991年1月7日のイラク侵攻に始まりますが、そのことを報道で知った時、私は本当に絶望的な気持ちになりました。ジョージ・ブッシュ大統領がイラクを攻撃すると言った時になんでこうなったのと歯噛みしました。

というのは、私は、元号が平成になった1989年から、時代は大乱世になっていくと直観していたからです。なぜならば、日本で「平」が冠で付く元号は2回しかないんです。平治の乱（1159年）が起こった「平治」と「平成」の2回しかない。

保元元年（1156年）に皇位継承をめぐって大混乱と戦争が起こります。それが保元の乱。その3年後、平清盛と源義朝が激突しその後武士政権になっていきますが、それが平治の乱。「平氏が治める」とも読めますね。

この平治の乱をすぐに想像したものですから、それ以前から、1980年代はやばいと思っていたのが、元号が平成になった時に、一挙に真っ暗な状態になった。

以来、「現代大中世論」を主張し、今はそれを「スパイラル史観」と言っています。それは古代と近代、中世と現代が大きな局面で共通した構造を抱えていて、先の時代の問題構造が隔世的に次の時代に現れてくるという史観です。つまり、積み残した課題がリサイクルしている。そんなスパイラル史観という歴史的な見方を仮説的にするようになります。

スパイラル史観で見れば、古代と近代は非常に似ている。巨大な帝国や大きい国が中央集権的に政府をつくり上げて強権的支配をしていくという構造です。

古代の場合は、中国の唐の律令を日本に導入します。近代の場合は、プロシアや欧米をモデルにして、日本の法体制をつくり制度改革した。

しかし、それが崩れていって多極化する。令外の官ができる。征夷大將軍も令外官で、1192年に源頼朝が征夷大將軍になる。その前に源平の合戦が起こり、1185年に壇ノ浦で平氏は滅亡しますね。

その令外官が、今世界史的に見ると、アメリカが征夷大將軍になって世界を軍事的に采配していると中世史と現代史を重ね合わせて見るようになったんです。

米国の征夷大將軍化と、日本の源平の合戦。その後、北条政権になり、足利政権になり、どんどん政権は交代していますが、基本的には、武断政治の権力が一方にあり、もう一方で天皇や公家の権威が律令制度としてある。

この二重体制が中世と現代の特徴である。今現在の「日本国憲法」も、米国支配の中の二重体制的な構造の中での「平和憲法」である。その葛藤と矛盾をずっと抱え込んでいる。こういうスパイラル史観が一つ。

そこで、中世において何が一番突出したかということ、死体です。「メント・モリ」の中世は、死体の氾濫する時代であった。その死体の氾濫は、十字軍の戦争であるとか、源平の合戦であるとか、南北朝の乱であるとか、応仁の乱とかの戦争でした。

さらに加えて、『方丈記』を見れば分かるように、地震、津波、疾病が頻発し

た。自然災害と人災が次から次へと押し寄せてくるという大混乱期を迎えた。しかし、その大混乱期に、死を前にして中世人は問い掛ける。

何を問い掛けるかという、どうしてこんな時代になったとかと歴史を問い掛けたのです。その時初めて日本に歴史哲学が生まれ、世の中の「道理」が変遷していったという歴史哲学が生まれた。天台座主を4回も務めた天台僧慈円が『愚管抄』を著します。この『愚管抄』が日本の歴史を考察する日本最初の歴史哲学書になります。

戦争や災害による多数の死体を目前にする時、人は「死」の起ってくる由来である「史」(歴史)を問い始めます。どうしてこんな時代になったのか。どうしてわれわれはこういう状況に陥ってしまったのか、そのことを反省し、歴史を吟味します。

今も私たちは、歴史振り返り、それも人類史や地球の歴史を含めての歴史をもう一回よくよく見直す必要があります。

加えて、中世に重要だったのは、歴史を振り返るだけでは、人間の心は鎮まらないということ。では、何をするかという、歌を歌った。それは何かというと、『平家物語』です。つまり、源平の合戦で亡くなった人たちを、いかに供養するか、鎮魂するか、そして心を安定したものにするか。戦争で亡くなっていった敗者の怨霊を鎮めなければ安心のある安定した未来はない。

心の安定化を図るために、『平家物語』のような大叙事詩が生まれてきた。NPO 法人東京自由大学の学長だった海野和三郎先生(東京大学名誉教授・天文学者、1925年生)のご先祖の海野行長がその『平家物語』の原作者です。

吉田兼好の『徒然草』の中に「信濃前司行長(しなののぜんじゆきなが)」が盲目の生仏(しょうぶつ)に覚えさせて語らせたとあります。海野和三郎先生はその子孫ですが、世界有数の天文学者となって私たちと一緒に東京自由大学を始めました。

そのような、死体から歴史を振り返り、『平家物語』のような叙事詩を歌うことによって鎮魂供養していくという「死－史－詩」の道筋が生まれてきたのです。これが中世の死生観、メメント・モリをもう一回浄化していくような動き

であったと思います。

3つ目は、3年前の2013年に、出雲大社の60年の遷宮と伊勢神宮の20年の式年遷宮が同じ年に行なわれました。それぞれ1400万余、800万余と、どちらも大変たくさんの数の参拝者が訪れ、その後も継続して参拝者が訪れている。

この8月末にも出雲大社へ参拝に行きましたが、神社に対する見方は、政治的な目もありますが、同時に、日本文化や防災を含む日本の歴史の根源から考えていくという動きの中で再注目されている面もあると思います。

一 出雲神話が問いかけるもの

そういう中で、私は、出雲神話をもう一度きちっと考え直さなくてはいけないと考えています。日本の神社が伊勢の神宮と出雲大社に代表されるとも言えるからです。伊勢は皇室として日本の表の文化をつくり上げてきました。それに対して、出雲とは、いったい何なのか。出雲は、どのようにして生まれてきたのか。

出雲に一番重要なのは、歴史とポエジーです。出雲の元はスサノヲノミコトと大国主神で、その二神ともに歌の名手です。『古事記』や『日本書紀』で最初に歌を歌ったのはスサノヲノミコトです。「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣を」。

こういう歌の始まりと成りたちを知るにより日本文化の根幹に何があるかを自覚することができます。もう一つ、スサノヲノミコトの乱暴狼藉が原因になることによって、天照大神が天岩戸に隠れたために、アマテラスをもう一回呼び出すために祭りを行うことが始まります。つまり、歌の発生も祭りの発生も、ともにスサノヲノミコトが関与しているということになります。

このように、歌と祭りは、スサノヲノミコトが原因で、とりわけ歌はスサノヲ本人自らが歌うというかたちで始まった。この歌と祭りが、日本の文化や神道の中にどう受け継がれていったのか。

宗教、宗派、教団、教派を超えた、宗教の大きい特徴は何かというと、どの宗教や宗派でも神話や儀礼や聖地があるということと、宗教の多くが「ゆるし」

を説いているということです。

「ゆるし」という言葉がふさわしくなければ、『古事記』の中では「ゆずり」ということになったり、共存というかたちになったり、受け入れるということになったりします。その「ゆるし」が実現しないと、共存はあり得ませんよね。なぜならば、許さなければ徹底的に相手に対して復讐を仕掛けていくということになりますから、必ずそこに復讐の連鎖が起こります。

キリスト教においても、仏教においても、「ゆるし」は極めて重要です。例えば、仏教の場合だと「怨親平等」、敵を恨まないということが、ブッダの時代から説かれています。例えば、『ダンマパダ（法句経）』には、「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である。」と説かれています。敵を恨むことがあれば争いが途絶えることがない。争いをなくすためには、その恨みを捨てることから始めなければいけないと初期のブッダの教えの中にあります。

ほぼ同じ時期に、墨子が「兼愛」を説いた。最近の言葉だと「友愛」ですね。博愛、友愛。そういう友愛主義を唱えた。イエスは、もちろん友愛の一番純粋なかたち、愛と赦しを説いた。そういう「ゆるし」の思想と実践が宗教の根幹にあります。そしてそれが、慈悲や愛を支えている根っこにある。

では、それはどうやって成り立つのか。実際問題、自分の子を殺された親が、相手を許すなんていうのは本当にできませんよね。人間的なレベルでは、ほとんど不可能だと思います。でも、人間的に不可能なレベルを乗り越えるというか、越えさせるのが宗教です。

仏さまとか、神様とか、ご先祖さまとか、もっと大きいはたらきや力の中で、今いまあるわれわれのポジションをもう一回見直していく大きな超越的な視線を持つことによって、私たちの未来や過去をもっと大きなまなざしで見つめ受け止め受け容れていくことが宗教の場合は起こり得ます。人間的な心のレベルでは不可能なことが宗教的超越によって可能になるのです。

また、そういうことが実践として重要だということを明確な教義として説いたりもする。しかしそれは、実践を伴わなければ、言葉だけのきれいな事で空洞

化します。キリスト教の歴史の中にも、さまざまな宗教の歴史の中にも、きれいな事だけで、言説だけで理想を説いたこともあった。でも、その一番根幹のところに、人間業を超えることを宗教は含んでいる。だからこそ、危険でもあり、すごい面を持っているのです。

では、神道の立場から見ていくと、『古事記』や『日本書紀』の流れから見ていったら、何になるかということを次に考えます。そしてそれが近代日本の宗教史の中でどう現れているかということを申し上げて、許しや譲りの問題が、具体的に神話や日本の歴史の中でどう現れているかを見ていきます。

まず、『古事記』。先ほど『古事記』には、出雲系と伊勢系の大きな二つの流れがあって、表は伊勢系になった。裏、陰の部分は出雲系になっていると言いました。

その出雲系の神々は「国つ神」とも呼ばれ、先住の神々と言えます。そこに新しく新来者として天孫降臨してきた系統が天照大神からニニギノミコト、今いまの皇室、天皇に至る流れになってきます。

この時、「国譲り」を行った。では、この「国譲り」は服従なのか、屈服なのか、征服されるということなのかと考えると、それは実に奇妙な構造です。単に征服ではない。単に服従でもない。これは、いったいどういう構造なのか。

私は、『古事記』を読めば読むほど、「国譲り」とはいったい何だろうと不思議に思ってしまいます。それは単に政治神学に説かれた神話ではない。もっと哲学的に、人間と社会の構造的な問題がここにはあると思うようになりました。

起承転結でまとめると、『古事記』の上巻は4つの流れが書かれています。国生み・国作り・国譲り・国治めの4つの流れです。

第1に国生み神話。イザナギとイザナミが国をどんどん生んでいきます。その生んでいった国を発展させるためには、第2に「国作り」をしなくては行けない。その「国作り」をするのが大国主神、出雲の神々になります。大国主神はスクナビコナの神と協力して国作りをします。

しかし、そこから大転換して、せっかくつくった国を譲ります。これが第3の「国譲り」の大転換。この時、天から降りてきた天孫が自分の方に支配権が

あると主張して、そちらの方に譲ることが行われるのです。

葦原中国と呼ばれているのがこの日本列島の現実世界で、大国主神が中心となって国作りされました。しかしそこは、天照大神の子孫が統治する国だされアマテラスの子どもであるアメノオシホミノミコトに派遣が命じられます。

その命令を実行する前に、先遣隊が送られます。その先遣隊長がアメノホヒノミコトです。このアメノホヒノミコトの子孫が、今の出雲国造家の千家や北島家の先祖なので、出雲国造家は、天照大神の子孫ということになります。つまり、先祖を辿れば、天皇や皇室と兄弟になる。

しかし、そのアメノホヒノミコトは、大国主神に媚びついて、3年が過ぎても復奏しなかった。返事をしなかった。

ここで考えるべきは、仲良くなる一番の具体的なかたちは、同族になったり結婚をしたりするということです。異質な者同士が結ばれるということです。大国主神の戦略というのはしたたかというか、すごいと思うのですが、懐柔というか、自分の方にアメノホヒノミコトを取り込んだたわけです。

そこで、次に第2弾が派遣されます。アメノワカヒコです。アメノワカヒコが弓矢を持って派遣される。ところが、行ったところで婿入りをしてしまう。大国主神の娘の下照姫と結婚して、今度は3年どころか8年経っても返事をしない。

そこでしびれを切らして、スパイというか、探知者を送る。それが鳴女。その鳴女の鳥を送り込んだところ、矢で射殺された。そこで反対に、その矢を射返したら、それを放ったアメノワカヒコに突き刺さって死んでしまう。

そこで続いて第3弾として、鹿島神宮の神、奈良の春日大社の第一殿に祭られているタケミカヅチの神が派遣されることになります。そしてそこで全権大使として「国譲り」の交渉をし、そこでようやく「国譲り」が実現した。

しかしこの時、大国主神は、自分では返事をせず、まず子どもたちに先に返事をさせたのです。美保神社に祭られている事代主神という長男の神に返事をさせたら、この国を天つ神の御子に奉りますと返事をした。

次に弟の建御名方神に返事をさせたら、「俺たちが一生懸命つくったものを、

なんでおまえらにやらないといけないんだ。そんな理不尽なことは到底承諾できない」と言って戦いを挑んできた。

そして、「力競べ」をして、タケミカヅチ、鹿島の神とがっ手をつかみ合ったところ、手がつららようになって、相手の力で切り裂かれそうになったので、恐れを成して逃走に逃走を重ねて、諏訪の地まで逃げて、以後、そこから出ませんということを約束した。そこに後に諏訪大社が創建されることになる。

このような子ども2人の返事の後、大国主神は最終的に、子どもたちが国譲りを承知したので、私もこの国を譲り渡しますと返答します。しかし、この時、その代わり、出雲大社（杵築大社）を創建してそこで丁寧に祭ってほしいと条件を付します。

そうしたら、表の側は天孫系のスメミマノミコトが治め、裏の方、「幽（かく）り」の世界は、自分たちが責任を持って治めるという約諾が交わされますが『古事記』と『日本書紀』では微妙に違いを持って語られます。

この後『古事記』では、巨大な宮殿、天御舎が建って、そこで天の御饗、つまり、おもてなしの祭りが行なわれます。立派な神殿に立派な神饌をお供えして祭りが行われる。この「国譲り」という一種の和解的約諾によって初めて平和的環境が整って天孫降臨できたということが具体的に書かれています。

ここのところは、どう考えても、不思議な解決法です。普通ならば、激突して戦って勝敗を決する。そのような対立・対決ではなく、大国主神は、巨大神社を建てて「顕幽」分離することによって和解の道を探るという離れ業をやった。超ウルトラCですね。この敗者の側の論理というか、条件闘争というか、こういうものが持つ意味は何なのかということを私はずっと考えてきました。

そもそも大国主神は日本神話最大の敗北者です。まず、大国主神は生涯で2回殺されています。しかも、兄神たちに2回も殺されて、母神たちの力で2回も甦った再生神なんです。1回目は、お兄さんたちに嫉妬され、策略により、焼けた大石の下敷きになって殺された。でも、IPS細胞による再生医療のように、母神や女神たちが再生してくれた。

IPS細胞というよりSTAP細胞ですね。STAP細胞は酔をかけたら再生でき

るようですから、「母の乳汁」をかけて実験管のような蛤の貝の中に焼けた細胞を入れて再生したのですから、まさに STAP 細胞再生医療で、エジプトのオシリス・イシス神話みたいに再生できた。これが 1 回目。2 回目は、木の股に挟まれて殺された。

あまりに殺されるから、これでは身が持たないといって、先祖のスサノヲノミコトのところに行ったら、今度はスサノヲノミコトに無理難題を課せられて、毒ヘビの部屋に一晩入れられるとか、いろいろな試練が課せられ、終には、野原で火を放たれて焼けて死にそうになった。絶体絶命の 3 度目のピンチ。

でも、いつも大国主神には助けと救いがもたらされます。大国主神が救った因幡の白ウサギが助けてくれるとか、スサノヲに焼き打ちされそうになった時には、ネズミがやって来て、ネズミが「内はほらほら、外はすずすぶ」と言ってヒントを与えてくれた。つまり、内には洞のような穴があるから、そこにいて隠れなさいということを示唆してくれたので、洞窟のような、防空壕のようなところに入って助かった。

こうして課題解決を突破した大国主神はスサノヲの娘のスセリビメと結婚して、出雲に帰って国作りをしていくという流れになっている。このように、大国主神は死と再生の神なんです。重要なのは、死んでも甦ることを繰り返している神であるということの持つ象徴的な哲学や思想であり、その特異な弱いけれどもしぶとく強靱なキャラクターですね。そういう不思議な再生力や協働力が大国主神にはあります。

こうして結局大国主神は、天から降りてきた神と激突せずに棲み分けつつ共存します。「幽りの世」につながる出雲大社に祀られ存在し続けてます。そして、60 年に一度、遷宮をします。伊勢は 20 年に一回、式年遷宮をしますが、出雲では、そのような隠れた世界で繰り返し繰り返し祀ら続け大きな社殿が継続されて再建され、今に至るもなお縁結びの神様として崇められている。

二 出雲神話の近現代の再奏としての大本

次に、この出雲神系を近現代に受け継いだとも言える神道系新宗教の大本の

話をします。出雲系の神道は大本に引き継がれていきます。大本は、明治25年、出口なおによって書かれたといわれている「お筆先」が世に出てくることによって登場してきます。それを基に娘婿でもう一人の教祖の出口王仁三郎がテキスト化したものが『大本神諭』といわれる聖典です。その一番始めに次の言葉が出てきます。

「三千世界一同に開く梅の花、艮の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。日本は神道、神が構はな行けぬ国であるぞよ。外国は獣類の世、強いもの勝ちの、悪魔ばかりの国であるぞよ。日本も獣の世になりて居るぞよ。外国人にばかされて、尻の毛まで抜かれて居りても、未だ眼が覚めん暗がりの世になりて居るぞよ。是では、国は立ちては行かんから、神が表に現はれて、三千世界の立替へ立直しを致すぞよ。用意を成されよ。この世は全然、新つの世に替へて了ふぞよ。三千世界の大洗濯、大掃除を致して、天下太平に世を治めて、万古末代続く神国の世に致すぞよ」。

このような、激しい神託、神々のマニフェストとして、『大本神諭』が世に出てきます。

この大本が担っている日本の歴史の中での象徴構造は、敗退して国譲りをした出雲大社系の、裏に隠れて日本を支えているものが再度世に出てくるという神話・神学です。近代化の過程で、表の方ではどうにもなくなり、人民は苦しみ、外国（害国）に支配されていく状況になって、文明は発達したかに見えるけれども、差別や強権的な体制が出来上がって、人民と社会の苦しみ、苦難は最大級になってきた。そこで、日本の古くからの神、もともとの隠れていた神、ここでは大国主神とは言わず、「艮の金神」と言われる「元の神」が出てきて、世の中を水晶のような、「霊主体従」の世の中に大洗濯し、大再構築をして、この世界を新たな世にするんだという、宗教的なマニフェストを打ち出します。これを、「世の建て替え立て直し運動」、つまり、「世直し運動」として推進していった。

その世直しの先陣を切って出てきたのが黒住教や天理教の「陽気ぐらし」であり、金光教の「取次」です。こうして、神と人との間を新たな形で再生に向

かわせる取り次ぎをするために大本が現れたということを、「お筆先」（大本神論）に、次のような言葉で表しています。

「東京で仕組を駿河美濃尾張大和玉芝国々に、神の柱を配り岡山。天理、金光、黒住、妙霊、先走り、とどめに艮の金神が現はれて、世の立替を致すぞよ」。

つまり、神様のはたらきというのは、さまざまなかたちで人々の中に立ち現れてくる。天理教や金光教や黒住教として現れる。そのような神のはたらきが、今の日清・日露戦争が起こって、日本が帝国主義的資本主義の一陣になっていく世界情勢の中で、物質中心の「体主霊従」の世から「霊主体従」の方向へ転換させるために、先行する宗教が幕末から出てきたけれども、とどめの段階で「艮の金神」が現れて、世の建て替えを本気で行なうと主張したのです。

では、日本を建て替えるはたらきの原理は何かといたら、今言った「霊主体従」原理。つまり、霊的・精神的な人間のあり方を基盤にして、みたまを磨いて、物質的なものを従にし制御しながら生きていくという生き方です。そうした「霊主体従文明」を作ることが方向性として示されます。

この「霊主体従」原理は出口なおの「お筆先」に基づきますが、それを元に出口王仁三郎は「霊学」を整備していきます。

そうした「霊主体従」的「世の立替建て直し」の世直し運動が大正 10 年（1921）に第 1 次大本事件が起こって、不敬罪と「新聞紙法」違反で逮捕されます。この時、逮捕されて、宗教活動ができにくくなったときに、出口王仁三郎は『霊界物語』という物語を口述筆記し、そしてやがて「明光社」という芸術芸能結社を作って芸術運動の方へ転換し、モンゴルに行ったり、自然農法などのさまざまな活動をしていきます。また、エスペラント運動、より普遍主義的な「人類愛善」運動を展開します。

他の教団、例えば、中国の道院・紅卍字会やイランのバハイ教など、海外の新宗教教団ともタイアップしながら、より共生的・協働的な宗教・宗派を超えた超宗教の運動や活動をしていこうとした。そしてそれを「スサノヲの道」と言うようになります。

私自身は、出雲が抱えてきた「国譲り」の問題と構造を、近現代に象徴的な

かたちで具体化した大本の宗教史的意味、その現代世界的な意味をもう一回汲み上げながら、これから先の未来というものを考え直していきたい。

私は、神道の根幹は、場所性にあると考えています。木、森、泉、岩、その偉大さを畏怖畏敬する自然崇拝が根本であると。自然の持つムスヒの力を畏怖畏敬し恭順に生きる。神道のもっとも大切にする価値観は、自然を生み出していく「ムスヒ」の力とはたらきへの畏怖畏敬と信仰です。それを別の言葉で表すと「生態智」になります。

それが一番の根幹になって、人間的な世界の公共のみならず、もっと大きな「生命的な公共」を、実現し共有していく。そうした「生命的公共」なしには、本当の安心、安定、安全、平和というものはない。

資源の確保競争や奪い合いになって地政学的な戦略による覇権の達成を求め構築していくようでは、一層の破壊や波乱は起こっても、安全も、安定も、平和も生まれることはありません。

今後向かっていく方向は、人間だけが住みよい持続できる社会を作るのではなく、「生命的な公共」をどのようにして実現するのかを、「生態智」という言葉をキーワードにして考え、それをベースにして人間の世界を点検しながら未来を志向することが必要ではないでしょうか。

そのときに、その理想世界は、大本では「霊主体従」原理に基づくのですが、わたしは「生態智」原理に基づく「平安きょう」の実現と考えます。その「きょう」は昔であれば「平安京」ですが、食べ物の豊かな「平安饗」、そして、歌声が響き、芸術が豊かに表現される「平安響」。そのような「饗」や「響」を内包する平安の里としての「平安郷」の構築と実現。そのためには先ほど言った、許すこととか、譲ることとか友愛世界の実現が大きな重要な未来の課題になります。もっともこれは、古来の最重要課題の一つでしたが、これまで部分的な達成はできたと思いますが、十全な実現はできていません。

おわりに～スパイラル史観の観点より

拙著『現代神道論－霊性と生態智の探究』（春秋社、2011年）や『世直しの

思想』（春秋社、2016年）で主張した「スパイラル史観」の観点から言えば、現代は中世のような乱世ですので、これからの時代はますます深刻に争いが深く激しくなっていくと思っています。もちろん、戦乱も増す。だから、戦乱が深くなっていく時代に希望を生み出さねばなりません。中世において能（申楽）を世阿弥が「天下の御祈祷」として確立したように、これからの“Arts of peace”を新たに生み出さねばなりません。中世や戦国時代には、能だけでなく、茶道も華道も生まれました。その大成者の千利休は殺されましたが、お茶というものを通して、あの戦国時代に待庵のような2畳の茶室を使って、戦国の武士たちが刀を外して、躰口から入って、一時の和解と平和を実現した。あの狭い特殊な空間の公共的共有というのは絶対的な信頼がないとできませんね。

そういうものをつくり上げていく安心文化を、中世は工夫して必要に応じて生み出した。戦国時代の激しい争乱期に。そういう新しい Arts of peace の創造の必要を私たちはすでに15年以上前から言い始めていますが、それを着実に実践し、Arts of peace を活用しつつ平和を作り上げていく。古語では、その Arts of peace を「ワザヲギ」と言いました。その新しい「ワザヲギ・Arts of peace」どうやって作つくり上げ、表現していくことができるのか。これが大きな課題になると思います。

私は毎朝、比叡山に向かって法螺貝や石笛やさまざまな横笛などを吹くことから一日を始めているのですが、今日は最後に法螺貝を吹いて活力をもう一回甦らせたいと思います。死と再生ですね。再生せしめて、第2部の有益なディスカッションで、皆さまからさらに有益な提言を受けながら考えを深めていきたいと思います。

（法螺貝演奏）

ありがとうございました。

（かまた・とうじ）